

聖霊降臨後第8主日（特定11） [B年]（横浜聖アンデレ）

2021. 7. 18

主よ、わたしの岩、わたしの贖い主、わたしの言葉と思いがみ心にかないますように。アーメン

- 1) 首都圏の1都3県の感染者が再び増加に転じる中、オリンピックを控えて、東京都は継続となった沖縄県と共に8月22日まで緊急事態宣言が出されました。その東京の後を追うようにして神奈川、千葉、埼玉の首都圏3県の増加も著しく、緊急事態宣言の発出を政府に要請することが検討されていました。

↓

礼拝の公開が再開されたところでは、何とかそれが継続されることを、そして休止のところでは再開されることを願うとともに、私たちにとって、教会に集い、殊に主日に共に礼拝をささげ、命の糧をいただくことの意味の重さを改めて受け止めていきたいと思えます。

↓

さて、7月も半ばを過ぎ関東は梅雨明けとなり、教会暦は聖霊降臨後の第8主日を迎えました。今日の特祷と聖書日課は特定11で、そこから私たちに与えられている福音（嬉しい知らせ）は、「平和は憐れみによって実現される」ということです。

↓

今日の福音書は、聖マルコの福音書第6章30節以下にある5千人への給食の箇所でした。主イエスさまと弟子たちは暫く休むために舟で人里離れたところへと向かいました。ところが、そこに大勢の人が駆け付けます。主は、大勢の群衆が飼い主のいない羊のようなようすをご覧になって、深く憐れまれた、とあります。

↓

やっと、しばし休むことができるかというところに多くの人が押し寄せてきたのを見られても、なおも主はご自身のことではなく、主を求めて来た人々を深く憐れまれました。しかし、弟子たちはそうではなかったようで、イエスさまが群衆に話をしている頃合いを見て、次のようにイエスさまに進言します。

「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行きましょう。」

↓

弟子たちは、自分たちが休みたかったし、食事もとりたいのではないのでしょうか。そのため、群衆を早く解散させようと考えたのかも知れません。群衆のことよりも自分たちのことを優先して、このように主に進言したのではないのでしょうか。それを見越してなのか、主イエスさまは弟子たちにこう命じられます。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」と。

↓

すると弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか。」と、主に問い返します。ここには、「食事をする暇もなかったほどに忙しく働いてきた私たちが、どうして群衆のためにパンを用意しなければならないのですか」といった、弟子たちの戸惑いと不満が現わされているのを読み取ることができるのではないのでしょうか。

↓

- 2) 今日の旧約聖書であるイザヤ書第57章14節以下にも、バビロンに捕囚となっていたユダの人々に対する神さまの深い憐れみが記されていました。み心に背いたご自分の民に対して、神さまは怒りを発せられているのですが、それでもなお、「わたしは、とこしえに攻める者ではない。永遠に怒りを燃やすものでもない。」といわれて、「打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり へりくだる霊の人に命を得させ 打ち砕かれた心の人に命を得させる。」といわれています。

↓

更には、「わたしは彼をいやし、休ませ、慰めをもって彼を回復させよう。」ともいわれ、罪を悔い改めて立ち帰る者に対しては、遠くにいる者にも近くにいる者にも、つまり捕囚となっていたユダの人々にも異邦の民にも平和を与え、

「わたしは彼をいやす」といわれています。

↓

それを受けて使徒書を見ると、エフェソの信徒への手紙第2章11節以下には、キリスト・イエスによる平和の実現に関する聖パウロの言葉が語られています。それは、ユダヤ人と異邦人との間の平和の実現に止まらず、「このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができる」というものです。つまり、そこには、神さまと人との間にもキリストによって平和が建てられ、ユダヤ人も異邦人であるあなたがたも、キリストというかなめいし要石において共に「聖なる民に属する者、神の家族」として建てられる、というのです。

↓

キリストにおいて、すなわち、キリストが現わされた神さまの憐れみによって、異邦人であるあなたがたも、ユダヤ人と共にみ前に建てられ、「霊の働きによって神の住まいとなる」、つまりは神さまがいつも共にいてくださることが実現する、というのです。

↓

- 3) イエスさまの憐れみとは、相手の痛みを我が身に感じることで、つまり共感ということであって、それにより相手との隔ての壁を取り壊すものです。福音書における、イエスさまとその弟子たちと、そしてそこに集まってきた大勢の群衆とが、群衆に対するイエスさまの深い憐れみによって隔てられることなく、聖パウロの言葉を使えば「二つのものを一つにし」、「双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し」たのです。それが、「すべての人が食べて満腹した」と記されていることが表している意味なのではないでしょうか。

↓

しかし弟子たちは、「人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買って行くでしょう。」とイエスさまに進言して、むしろ自分たちと群衆を隔てようとしているようです。

↓

それでもなお、主はそこで、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」といわれて、自ら群衆にパンと魚を分け与えられ、人々を満腹させられました。つまり、主は人々を命に生かされ、五千人の人がイエスさまの御業によって5つのパンと2匹の魚で満腹させられ、イエスさまを通して神さまが共におられる平和がそこに実現されたのです。

↓

満腹とは人々がイエスさまによって養われ生かされたということを表わしており、それは、預言者イザヤが授けられたみ言葉によれば、いやし、休み、また慰めであり、命を得ること、すなわち、「わたしは唇の實りを創造し、与えよう。平和、平和、遠くにいる者にも近くにいる者にも。わたしは彼をいやす、と主は言われる。」と告げられているもので、イエスさまの憐れみによって建てられた平和を指し示しています。

↓

- 4) 憐れみは相手の痛みを我が痛みと感ずることによって、隔ての壁を打ち壊します。そこで隔てが除かれることによって、平和が建てられます。それは、自分の中で完結する世界ではなく、共感、すなわち共に感ずる世界です。それが、主イエス・キリストが十字架によって成し遂げられた神さまと人との和解であり、それは人同士においてもまた、お互いに平和を造り出してゆくものなのです。なぜなら、五千人が満腹させられた時、弟子たちもイエスさまによって群衆と共に満腹させられたと考えられるからです。

↓

憐れみは隔ての壁を打ち破り、そこに平和を生み出します。その平和とは、父なる神さまがみ子において受肉され、私たちと共におられることによって建てられた憐れみによるものであり、そこでは命が生かされ、養われていったのです。

↓

私たちの罪の贖いとなり、私たちを死から命へと捉え移してくださったみ子イエス・キリスト、この方による深い憐れみの内に現わされた父なる神さまの全能を共にほめ讃え、私たちはますます主イエスさまに倣い、主の憐れみをもってみ国の平和を造り出す者となって、その御跡をこれからも日々、絶えず、辿って参りたいものです。